



発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
tel/052-789-4953 fax/052-789-4951

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

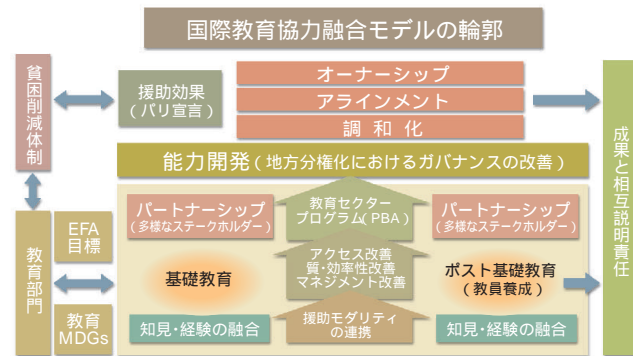
発展途上国の基礎教育開発における国際教育協力融合モデルの構築 「万人のための教育」目標達成へ向けた能力開発

国際開発専攻 教授
廣里 恭史

当研究科の「教育・人材開発プログラム」教員メンバーが中心となり、教育発達科学研究科教員との共同によって企画・申請した表題のプロジェクトが、平成18年度の文部科学省「拠点システム構築事業 - 国際教育協力イニシアティブ」に採択され、平成18年7月から平成19年3月まで約9ヶ月間に及ぶ活動に従事した。

1990年に開催された「万人のための教育世界会議 (The World Conference on Education for All)」と2000年の「世界教育フォーラム (The World Education Forum)」において、基礎教育 (Basic Education) 普及を目指す「万人のための教育 (Education for All: EFA)」目標が合意され、その実現へ向けた試みが発展途上国 (以下、途上国) を中心として世界各地で積み重ねられている。また、EFA目標に象徴される基礎教育の普及は、教育セクターのみの課題ではなく、途上国の社会経済開発を進めるうえで重要な課題の一つであると認識されている。それは、2000年の「国連ミレニアム・サミット (The UN Millennium Summit)」で採択された「ミレニアム開発目標 Millennium Development Goals: MDGs」の8つの目標のうち、初等教育の普遍化 (目標2) と教育における男女格差の解消 (目標3) がEFA目標と重複していることから窺える。しかし、EFA目標を実現するには多くの問題が山積していることから、現在、EFA目標達成のための戦略見直しが行われ、特に途上国の基礎教育開発に対する援助のあり方について国際的な議論が展開されている。こうした議論はいわゆるプログラム支援 (Program-Based Approach: PBA) が主流化しつつある状況を生み出してきた。さらには、途上国が推進している地方分権化の文脈に沿って、こうしたプログラム支援を通じた地方レベルでの人的、組織的、制度的な能力開発 (Capacity Development) の重要性が強調されている。

そこで、本事業では、このような国際的動向を踏まえつつ、主要な教育セクター開発課題とEFA目標達成戦略の見直しに沿った基礎教育開発支援のプログラム化を目指した。そして、こうしたプログラム化を具体化するために、途上国の基礎教育開発における国際教育協力の「融合モデル」なるものを構想した (図を参照)。また、教育「セクター・プログラム支援」が進行中であるインドシナ諸国 (カンボジア、ラオス、ベトナム) を訪問し、この融合モデルのあり方を具体的に検証するとともに、EFA目標達成のために必要とされる能力開発の方法論の検討を試みた。



途上国の教育セクターにおける能力開発は、PBAによる「セクター・プログラム支援」といった新しい協力アプローチが導入されつつあるにしても、主として中央レベルでの政策策定、計画、モニタリング・評価に関する能力開発に留まっており、地方政府や学校レベルでの取り組みは不十分な状況にある。質の高いEFA目標の達成に向けた真の挑戦は、就学に関する数値目標達成だけに留まらず、教授と学習の質的向上をもたらすこと、すなわち学校や地域社会において「満足できる質を伴った持続可能な学習環境」を創出することであろう。したがって、EFA目標達成は、中央レベルにおける取り組みだけではなく、地方 (州/県・郡・コミュニティー) や学校レベルにおける個人・組織及びシステムの能力開発の度合いに拠るところが大きい。本事業で構想する「融合モデル」は、今後の基礎教育支援のあり方を考えていく際の指針となることを意図している。ただし、本事業は、あくまでも「融合モデル」の提示を目指しており、時間的制約により詳細な事例への適用を検証するには至っていない。そのため、地方分権化におけるEFA目標達成へ向けて途上国で展開されている「セクター・プログラム支援」の成果と、学校レベルにおける「満足できる質を伴った持続可能な学習環境」との乖離を埋めるための能力開発のあり方を、このモデルにもとづき幅広く検討することが、今後の課題として残されている。



ベトナムの小学校における授業風景

2006年度 学位授与状況

2006年度に当研究科(GSID)より授与された学位数は以下のとおりです。

論文博士取得者なし。課程博士取得者18名。課程博士取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)9名、国際協力専攻(DICOS)6名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)4名です。

修士学位取得者は73名。取得者を専攻別に見ると、DIDが22名、DICOSが25名、DICOMが26名です。



博士学位取得者記念撮影(DID)



博士学位取得者記念撮影(DICOS)



博士学位取得者記念撮影(DICOM)

2007年度 入学状況

1 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	33 28 67	14 16 28	11 15 24
国際協力	25 19 44	12 13 26	10 12 21
国際コミュニケーション	28 20 40	13 8 22	13 7 21
合計	86 67 151	39 37 76	34 34 66

注...赤は女性、青は留学生で内数

2 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	5 7 11	4 5 9	4 5 8 1
国際協力	7 7 15	7 3 11	7 3 11 5
国際コミュニケーション	7 6 12	7 6 11	7 6 11 8
合計	19 20 38	18 14 31	18 14 30 14

注...赤は女性、青は留学生、緑は進学者で内数

修了生の声

Ministry of Planning and Investment(Vietnam) Foreign Investment Agency Le Viet Anh
Surely you faced many difficulties during the Ph.D. program. How did you overcome them?

The most difficult task for many people in the Ph.D. program is to correctly identify their position in their field of study. An old expression says that Knowing that you don't know is what you know. Once you know your level, you can know where to start from, and how much time it will take. Usually, at the beginning, Ph.D. students will choose a very big topic for their dissertation. However, when they start to know their level, they will narrow it

down. And finally, a very small topic compared to the first one will be finalized when the student realizes that he or she knows only a little at the beginning. Just getting to this point is very hard work. To learn that you don't know, you should be a great reader. The more you read, the more you know, and the more you know that you don't know. With patience, power of endurance, and determination, the student can



establish self-confidence and dedication, the two most important qualities for a Ph.D. candidate.

I began to check my level by reading journal articles. Do not be surprised that you do not understand anything as you first read!!! After reading several articles on the topic that I was interested in, I got to know my level and how to fill the gap. I think this is a very effective and efficient way for students to know their level in academics.

Did you attend any academic conferences during the Ph.D. program?

During the Ph.D. program, I attended two academic conferences. I think that attending conferences should be a compulsory requirement for the course since it helps students improve their presentation skills. As everyone knows, understanding is one thing, but making yourself understood to others is a different thing. In that sense, presentation skills are very important for students' future jobs, whether as practitioners or researchers.

Any suggestions for the improvement of GSID?

In my opinion, GSID offers a very good environment for doing high level research. Professors are very supportive

and of high professionalism. Facilities are excellent. However, I think that there is still room for further improvement of the Ph.D. program. I understand that pursuing a Ph.D. degree, a student must be able to do independent research. But since the academic levels of students are different, at least one year of coursework should be introduced. Ph.D. students should also be required to deliver lectures to undergraduate students and/or master's students. If this is difficult because GSID does not have undergraduate students, Ph.D. students should be assigned to help master's program students with their seminar presentations. However, the responsibilities of Ph.D. students should be defined clearly to prevent excessive demands from master's program students. Financial compensation should also be taken into account.

As a student studying economics, I think that specialized courses on quantitative techniques (such as regression analysis and general equilibrium analysis) should be introduced as coursework (and to be counted as compulsory credit for Ph.D. coursework).

1. 学位証書 去った母への思い

博士号の学位証書を頂いた時、この6年間の努力の結果を一番に捧げたいと思ったのは、4年前に他界した母です。故郷を離れて一人で日本に来るときに、まだ元気だった母は異国での息子の一人暮らしを心配し、どんなに息子の帰りを期待していたか。私の留学生活は当初予想もしなかった10年となり、私の最終帰国を待たずに母はこの世を去っていきました。日本に来た当初、緊張した生活をしながら日本語の勉強を続けるなか、夜空の星を眺めながら母のことを思い出したときに、詠じた漢詩があります。

揮別郷親滿眼淚、
東瀛一去不知歸。
含辛茹苦十年恨、
報得慈母三春暉。

(日訳) 故郷の親友に別れを告げて涙が溢れる
東瀛[日本]へ行けば帰りの日は分ならず
辛く苦しい10年間の日々を耐え忍ぶ
その支えはただ母国の母親に孝心を捧げること

2. GSIDでの苦労と喜び

GSIDに在籍した6年間は、私の人生において大きな転換点になっています。GSIDでは、各国から優秀な学生たちが集まり、ここで様々な文化に触れ合い、自分の視野を広げることができ

戴 龍 (DAI Long)



ます。GSIDの先生たちは、学問だけでなく、教養も高く、国際的視野を持つ方々ばかりです。GSIDで喜ばしいことは、各国の学生と様々なコミュニケーションができ、ゼミや勉強会などで多くの知識を吸収し、活発なディスカッションから様々な理論的発想がでてくることです。そして、GSIDでのつらいことは、博士論文の執筆段階で指導教官から何度も叱られて、本当に博士論文を書けるかどうかという絶望的な時期が何回もあったことです。しかし、博士論文の完成に伴い、ようやく指導教官の苦勞もわかるようになり、指導教官の鞭撻がない限り、自分はこれまで様々な調査研究をできなかったと思います。

3. 人生の道に頂上なし

博士学位を取得したことは、これまでの長い留学生活が一段落したことを意味し、これからは本当の研究生活のスタートです。今後、どのように自分の研究と留学経験を生かして母国の学術の向上に貢献するか、現在未だ試行錯誤の途上にあります。ただ、常に意識したいことは、人生の道に頂上なく、研究すればするほど自分の未知の世界が広がるということです。自分のできることを全力を尽くしてやっていたら、必ず自分なりの力でこの社会に貢献できると信じております。

新スタッフ紹介

国際開発専攻 教授
藤川 清史



2007年4月に国際開発専攻に着任しました。皆様、宜しく申し上げます。本研究科では統計学を担当します。

私、生まれも育ちも神戸です。麺類好きで、阪神タイガースを応援し、会話にボケと突っ込みを交える典型的関西人です。教師歴はそれなりに長く、これまで関西の私立大学(複数)で統計学と情報処理の講義を担当して参りました。

そんな私にとって、名古屋大学への赴任は、色々な意味で初体験でありました。私は関西から出たことがありません。関西人は実は閉鎖的で保守的ですし、身内で集まるのは好きですが、自分自身が「よそ者」になることを想定していません。そんな関西人が、国際的で革新的な名古屋の街に移り、中でもこの国際開発研究科に赴任したのですから、うまく受け入れられるのだろうか、かなりビビっています。加えて、前任校の私立大学では、学生さんは、時間割の埋め物的に統計学を受講するので、あまり真剣ではありませんでした。一方、国際開発研究科の学生さんはとても熱心なので、やりがいを感じるとともに、自分がどこまで役に立っているのかとおじけづいたりもしています。しかしながら、腰が引けてはいるは何事もうまくいきませんので、何とか頑張りたいと思います。

さて、自分が統計学を専攻するようになったのは、学生時代の恩師の講義のおかげです。その先生が学部の講義でこう言われました。「統計学は、未知の母数を誤差つきで推定するという意味で、いいかげんな学問だが、その誤差がどれぐらいの大きさであるかは厳密にわかる学問だ」と。そのときはその意味が正確にはわからなかったのですが、天邪鬼の藤川としては、こういう逆説的な言い方がとても気に入り、もっと統計学を勉強してみようという気になりました。現在もまだまだ統計学の奥義を理解したわけではないのですが、奥が深いことだけはだんだんわかってきました。

昨年、採用申請書類を準備していると、履歴書や業績一覧の他に「講義についての抱負」を用意せよということでした。私は生意気にも、学生さんに統計学の応用例を紹介しながらその面白さを伝え、学生さんに統計学の心を知ってもらいたいという内容を書きました。私の講義を通じて、学生さんに統計学への興味を持ってもらい、彼らの研究で実際に統計学を使ってほしいです。そして、その有用性を実感してもらえれば、教師としてとても嬉しく思います。



国際協力専攻 准教授
島田 弦



本年度より国際協力専攻教員として着任しました。インドネシア法を専門に研究しており、本研究科では、開発法学とアジア法(それぞれを隔年開講の予定)そして平和構築特論を担当します。

1993年に国際協力専攻第2期生として、名古屋の地に足を踏み入れ、インドネシア留学、アジア経済研究所での客員研究などで出たり入ったりしながら、気がつけば人生で一番長い場所になってしまいました。まさか、同じ大学で教鞭を執ろうとは想像もしていませんでした。また、慣れ親しんだ学生としての立場と、教員としての立場の違いに戸惑うこともたびたびです。

法学部生の時のゼミで、発展途上国における頭脳流出問題と、人権としての移動の自由の緊張関係に関する文献に触れたことが、私を開発と人権の問題に引きつけ、この世界に入るきっかけとなりました。もっとも、大学院進学を考えたときに「金沢のような田舎にいるより、もう少し都会に出なさい」という当時のゼミ教官の助言も大きかったのですが。

インドネシアとの出会いは、修士課程在籍中にたまたま目にした小さな新聞記事でした。政府によって発行禁止処分となった雑誌の編集長が、処分の違法性を訴えた裁判で勝訴したという事件の記事です。当時、私はインドネシアについては軍事独裁国家で、表現の自由も司法の独立もない国だろうというイメージしかありませんでした(そのイメージ自体はさほどの外れでもありません)。そんな国で、このような判決のあったことに驚き、いったい何が起きているのかを確かめようと言うのが出発点でした。

表現の自由がなく法がまともに機能していない国で、人権を研究してどうなるのかという意見もありましたが、私の勘は、一つの国を全く法的ロジックなしで統治することは不可能だろうし、また法的ロジックは多くの論理と事実の蓄積上にしかありえないのだからそれを研究する価値はあるだろうというものでした。そこから、開発主義、アジアの人権論、国家統合などインドネシア国家の論理と法制度の関係、さらにそれに影響を与えた文化要因や欧米の思想潮流を明らかにしながら、インドネシア法の形成過程と現在を探求してきています。

開発も平和構築もまた複雑きわまりない社会を対象とするものであり、したがって法的ロジックへの洞察は不可欠なはずですが、これこそがGSIDで法を研究する意義であり、学生の皆さんにもこの研究に是非つきあってほしいと願ってやみません。

研究プロジェクト紹介

戦後処理過程における人の移動と定着

国際協力専攻 教授 中西 久枝

2006年4月から「戦後処理過程における人の移動と定着 民主化支援からオートノミー構築へ」という科学研究費の調査研究を開始した。国民国家形成過程で、多数派の民族が少数派の民族を「民族浄化」する例は、アルメニア共和国のナゴルノ・カラバでのアゼルバイジャン人や中東5カ国にまたがるクルド人の例など数多い。クルド人の問題は、第一世界大戦後、ヨーロッパが「戦後処理」という大義でオスマン帝国とのあいだに締結した1923年のローザンヌ条約にルーツがある。最近では逆に、2003年のイラク戦争の開戦以来、イラク北部に住むクルド人が、サダム時代のアラブに追い出されたキルクーク油田地帯に移動し、スンニー派アラブや少数民族のトルコマン人を追い出している。その背後で米英は油田権益をクルド人と共有していると言う。イラクの再建や民主化支援を米国は各国に呼びかけているが、本当の目的は欧米に利する「市場経済化」である。キルクーク油田の収入を中央と地方政府がどのように分けるのか、イラク憲法をめぐる解釈でイラクの各派が争うなか、イラク情勢は日々刻々と激化している。実際には終結していないイラク戦争を米国は早々に戦争終結と宣言し、クルド人に肩入れした政策を「戦後処理」の問題だとしている。大国の政治的・経済的利害が民族間の対立に大きく影を落としている。昨年の夏イラク北部からトルコに

越境しているトルコマン人の家族への聞き取り調査をトルコの首都アンカラで行なった。トルコマン人はトルコ系民族であるため、トルコ政府も多少は受け入れている。EU諸国は、クルド問題を人権問題と捉え、より寛容な政策を取るようトルコに圧力をかけている。他方、「EU加盟をめざす与党はクルド人によるトルコマン人虐殺問題をあまり公にしていない」という批判も国内では出ている。昨年7月から8月にかけてイラク北部では局地的に暴動や爆撃が激化し始めていた。トルコでは、着のみ着のまま避難してきたばかりのトルコマン人に多く出会った。1歳や3歳の子供を抱えながら逃げてきた家族もいた。「民主化支援」という欧米の政策で救い上げられないこうした人々に対し、安全で自尊心がもてる生活を国際社会がどう保障していくのか、課題は多い。今後の研究では、自分たちの独立国家を単独ではつukれない規模の民族が自分たちの自律的な生活空間を確保していけるようなしくみを考えていきたいと思う。

イラクのキルクークからトルコに避難したトルコマン人の難民家族とのインタビュー(筆者撮影 2006年8月12日)

TOPICS

チュラロンコン大学実地研修の受け入れ

国際協力専攻 教授 大橋 厚子

GSIDは、平成19年3月5日から11日まで、タイ王国の王立チュラロンコン大学大学院国際プログラムビジネス経済専攻による日本での実地研修を受け入れた。この研修は中部にある製造業企業の事例研究を目的としており、今回は、平成15年3月の実地研修受け入れに続いて2度目となる。昨年度6月に同プログラムから打診があった当初、研修実施は9月を予定していたが、タイで発生したクーデターによって延期され、今年3月の実施となった。

国際プログラムビジネス経済専攻一行は教職員4名、学生18名からなり、3月5日朝中部国際空港に到着後、11時半に名古屋大学に來校して旅装を解いた。宿舎は学内の職員クラブ、シンポジオンなどである。2時半からGSIDの歓迎式に臨んだあと、15時よりGSID新海助教授による「日本の経済現況」と題する講義を受けた。そののち6日から8日まで、次のような日程で研修を実施した。6日午前には新海助教授の引率によってリンナイ大口工場で研修し、午後は犬山城まで足を伸ばした。7日午前は大坪教授の引率で大曾根にある三菱電機工場で研修し、午後はナゴヤドームなど近くの施設を見学した。8日午前にはスネート留学生担当講師の引率で、タイ国に深い日泰寺および日泰寺に隣接し戦後タイ人留学生の寮ともなった揚輝荘を見学し、午後は大坪教授の引率で半田市のミツカン本社において研修を行った。なお、これら3つの企業はタイ国にも工場を持ち、学生達は既にタイ国内の工場を調

査しているため、いずれの工場でも見学後に活発な質疑応答が行われた。GSIDの主催する歓迎パーティーは6日18時からGSIDプレゼンテーションルームで開かれ、山本進一副総長に御出席いただいた。こののち一行は9日に名古屋城、名古屋港、水族館、大須観音、10日にはJRセントラルタワー、東山動物園・植物園といった名古屋市の商業地区の視察、および名古屋の観光名所を訪れたのち、11日午前中に中部国際空港より帰国した。

GSIDは1992年以来毎年、開発途上国で海外実地研修を行っており、昨年度までで15回の実施となる。学术交流協定校のチュラロンコン大学にはこれまでに5回現地カウンターパートを引き受けていただいているが、受け入れ窓口は5回とも国際プログラムビジネス経済専攻であった。今回の研修受け入れはこのような教育面での相互交流の一環となっている。



GSIDにおける歓迎パーティーにて



タイ人留学生縁の揚輝荘にて

国際理解教育プログラム (EIUP)

EIUP代表 国際開発専攻 博士課程前期課程 山田 みの理

国際理解教育プログラム(EIUP)は、GSIDの院生を主体とした非営利団体です。GSIDには様々な文化的背景や経験を持つ大学院生が国際的視野から開発・協力・交流について学んでいるという特性を生かし、地域の国際化に貢献するのを目的とした活動を行なっています。GSID設立10周年記念プロジェクトの一つとして、本研究科大学院生有志がEIUPを立ち上げ、2000年度より「国際理解教育デリバリー」という活動を開始し、8年目を迎えた現在も精力的に活動を行なっています。

文部科学省の学習指導要領にも国際理解教育の必要性が掲げられている中、生徒があまり接する機会のない、留学生や海外で活躍する日本人と実際に交流することにより、身近な視点からの国際理解教育を行うことを目的として「国際理解教育デリバリー」を行なっています。具体的には学校からの講座の依頼をEIUPスタッフが審査し、承認された案件の授業作りをEIUPがお手伝いする形で授業案の助言や講師となる留学生探しなどを行なっています。講座では講師が自国の文化をただ紹介するだけでなく、ゲームやクイズなどを交えて子ども達に紹介し、また児童・生徒から日本文化の紹介を受けることもあり、異文化の相互理解に貢献しています。

2006年度後期(第14期)はスタッフ15名で7件の講座デリバリーを行ないました(表参照)。講座デリバリーは、学校側から要請があったものをわたしたちEIUPスタッフが審査し、引き受けの連絡をしてから始まります。担当の教員と講座の打合せをするかわら、EIUPスタッフでもより良い講座デリバリー作りのために意見を出し合いながら議論を重ねていきます。同時に講師となる留学生を探すこともスタッフの大切な役割であり、学校からの要請と一致し、かつ日程などの条件の合った留学生を見つけることはこの講座デリバリーの困難な点の一つです。しかしそれらの苦勞を乗り越え、実際に講座デリバリーで児童・生徒との触れ合いや留学生の生き生きとした活動、また自分たちが企画した講座が無事に成功したときにはやはり嬉しさがこみ上げてきます。そんな一時のために、わたしたちスタッフは勉学との両立に苦勞しながらも、仲間同士励ましあってこの活動を続けています。

現在EIUPでは、今後の講座デリバリーをより良いものにしていくために日々議論を重ねています。14期の反省を15期に生かすために先日「EIUP振り返り会」を開き、問題点を共有し改善点を議論しました。ここで挙げた改善点を、15期に既に実施が決まっている案件に即して実践できるように現在調整中です。またEIUPでは、わたしたちの活動を支援して下さる皆様に日ごろの感謝の意を込めて、半期に一度のペースで交流会を開いています。講座デリバリーに参加して下さった留学生だけではなく、EIUPの活動をGSIDの皆様により一層理解していただくためにも、EIUPの紹介だけでなく国際理解教育に興味のある日本人の方や日本の学校に興味のある留学生の方を集め、ささやかな交流会を開いております。この機会にEIUPの活動と存在意義をご理解いただき、わたしたちと一緒に活動をしていただけたらと思っております。

4月から新しいスタッフも増え、今まで以上に活気のある団体に成長してきました。既存のEIUPの活動をより充実させるのはもちろん、新しいことにも挑戦しようとスタッフ一同意気込んでおります。このように日々進化を遂げるEIUPの活動への変わらぬご理解・ご支援をどうぞよろしくお願い致します。



講座デリバリーの様子



子ども達と一緒にダンス



タイと中国の文化の紹介



ミーティング風景

第14期 講座デリバリー 一覧

講座デリバリー実施校	時 期	留 学 生	テ ー マ
多治見市脇之島公民館	2006年10月	タイ・台湾	世界は友達
名古屋市立大清水小学校	2006年10月	パプアニューギニア	異文化の音楽を知ろう
多治見市立精華小学校	2006年12月	ブラジル・中国	世界の文化や人の生き方を大切に
桑名市立多度南小学校	2006年12月	ガーナ・ネパール	環境問題について
名古屋女子大学中学校	2006年12月	カンボジア・中国	外国から見た日本とは
豊山町立志水小学校	2007年 1月	タ イ	国際交流しよう
名古屋市立若水中学校	2007年 1月	インドネシア・台湾	留学生と交流しよう、日本文化を伝えよう

スタッフの人事異動

教員

平成19年3月31日 退職
 国際開発専攻国際開発講座 教授
 江崎 光男(大分大学経済学部教授へ)
 国際協力専攻国際協力講座 教授
 安田 信之(関西大学政策創造学部教授へ)
 情報担当 助手
 福田 ムフタル(名古屋産業大学准教授へ)
 英語論文執筆補助担当 助手
 ラセガード ジェームス(東洋大学法学部講師へ)
 「魅力ある大学院教育イニシアティブ」特任講師
 矢倉 研二郎(阪南大学経済学部講師へ)

平成19年4月1日 採用

国際開発専攻国際開発講座 教授
 藤川 清史(甲南大学EBA高等教育研究所教授から)
 国際協力専攻国際協力講座 准教授
 島田 弦(名古屋外国語大学専任講師から)

事務

平成19年4月1日 転出

事務室長 村田 清(総務部人事労務課へ)
 教務担当 大屋友美子(環境学研究所へ)

平成19年4月1日 転入

教務G掛長 隅坂 弘幸(医学部・医学系研究科医事課から)

客員研究員の紹介

国内客員研究員

岡田 尚美(国際開発高等教育機構 事業部長)
 研究題目 / 開発プロジェクトの管理運営手法研究について
 期 間 / 平成19年4月～平成19年9月
 葉山 アツコ(久留米大学経済学部 准教授)
 研究題目 / フィリピンにおける熱帯林再生事業の持続と
 村落組織に関する研究
 期 間 / 平成19年4月～平成19年9月
 米澤 彰純(東北大学高等教育開発推進センター 准教授)
 研究題目 / 大メコン川流域における高等教育の発展と改革
 に関する研究 公と私の役割分担に注目して
 期 間 / 平成19年10月～平成20年3月
 木島 陽子(筑波大学大学院システム情報工学研究科 准教授)
 研究題目 / Effects of Mobile Phone Network
 on Agricultural Trade in Ethiopia
 期 間 / 平成19年10月～平成20年3月
 永淵 康之(名古屋工業大学大学院工学研究科 教授)
 研究題目 / 政治批判と宗教批判の相克 - スハルト体制以後
 のインドネシアにおけるヒンドゥー教徒の運動
 期 間 / 平成19年4月～平成19年6月
 石井 正子
 (大阪大学グローバルコラボレーションセンター 特任准教授)
 研究題目 / 『海外労働者の女性化』が開発に与える影響に
 ついて フィリピンの開発過程と女性労働政策
 期 間 / 平成19年4月～平成19年6月
 成瀬 猛(国際協力機構バレスチナ事務所 所長)
 研究題目 / 日本の平和構築支援の現状と課題
 期 間 / 平成19年7月～平成19年9月
 高畑 幸(広島国際学院大学現代社会学部 講師)
 研究題目 / 東海地区における在日フィリピン人の動向
 期 間 / 平成19年7月～平成19年12月
 土佐 弘之(神戸大学大学院国際協力研究科 教授)
 研究題目 / 国際人道支援と 包摂 / 排除 の政治
 期 間 / 平成19年10月～平成19年12月
 櫻井 進(南山大学人文学部 教授)
 研究題目 / 江戸・明治期における社会変容の連続性と非連続性
 - 時間感覚と宗教意識の社会的考察 -
 期 間 / 平成20年1月～平成20年3月

古谷 修一(早稲田大学大学院法務研究科 教授)
 研究題目 / 国家再建・平和構築過程における国際刑事裁判の機能
 期 間 / 平成20年1月～平成20年3月
 勅使河原 三保子(徳島大学国際連携教育開発センター 学術研究員)
 研究題目 / 大学工学教員に対する英語教育
 期 間 / 平成19年4月～平成19年9月
 松田 和夫(日本大学法学部 教授)
 研究題目 / 比較文化論
 期 間 / 平成19年10月～平成19年12月
 田中 伸一(東京大学大学院総合文化研究科 准教授)
 研究題目 / 言語情報システムにおける最適化と
 進化に関する理論的研究
 期 間 / 平成20年1月～平成20年3月

外国人客員研究員

Suppakarn Pongyela(カセサート大学社会科学部 助教授)
 研究課題 / 1988年以降の日本の対ミャンマー外交評価
 期 間 / 平成19年4月1日～平成19年9月10日
 康 保成(中山大学中文系 教授)
 研究課題 / アジアにおける無形文化遺産保護に関する研究
 期 間 / 平成19年4月2日～平成19年6月30日
 Bunlay Nith(王立プノンペン大学開発学大学院 上級講師)
 研究課題 / カンボジアの大学院における研究関連科目の
 統合に関わる諸問題に関する研究
 期 間 / 平成19年4月3日～平成19年8月4日
 Paul Kei Matsuda(ニューハンプシャー大学英語学部 准教授)
 研究課題 / ライティングに関する外国語・第二言語間の関係の再検討
 期 間 / 平成19年7月1日～平成19年9月30日
 Jan Oberg(国際平和未来研究財団 理事長)
 研究課題 / 国際協力における平和構築支援の役割
 期 間 / 平成19年9月11日～平成19年12月20日
 Norman Cook(カナダ国際開発庁 ディレクター)
 研究課題 / 国際協力、国際開発に関する研究
 期 間 / 平成19年10月1日～平成20年3月31日
 Genevieve Escure(ミネソタ大学 教授)
 研究課題 / 混合言語における文法化と証拠性のマーカーに関する研究
 期 間 / 平成19年10月1日～平成19年12月31日
 Nargis Kassenova(公共政策研究センター エキスパート)
 研究課題 / 中央アジアの国家・人間の安全保障
 期 間 / 平成19年12月21日～平成20年3月31日

院生活動紹介

GSID院生会の活動

院生会実行委員 国際協力専攻 博士課程前期課程 川原 望美

私たち院生会実行委員は、GSIDの学生自治団体である院生会の代表として意欲あるメンバーによって構成されています。GSIDの学生が快適な生活を送ることが出来る環境を整えるために自発的な活動を行っており、主な活動として、OB・OGを招いての就職セミナーや学生全体を巻き込んでのGSID内の掃除キャンペーン等を行っています。

その中でも、学期の節目毎に開催するパーティーは、勉強に打ち込むだけでなくGSIDでの生活をより楽しんでもらうために重要な役割を果たしています。また、日常生活における人間関係を超越して、留学生を含めた学生達や教員の人的ネットワークを広げています。4月の新入生歓迎、10月の留学生歓迎、3月の卒業生歓送を中心に交流の場を提供しています。

2007年4月27日には、今年の新入生を迎えるパーティーを開催しました。

その中で、各専攻の学生に、先生方や専攻について発表してもらいました。ここでは、ゼミ生のみが知る先生方の裏話や物真似などが披露され、会場を沸かせ、発表後の歓談の中でもその話題で盛り上がる参加者の姿が多く見られました。

今回の歓迎パーティーを開催するにあたり、多くの学生の協力を得て成功させることができました。いきおいのある司会やDJ顔負けの発表者、凝ったプレゼンテーション資料などが功

を奏して、新入生の心をつかむパーティーとなりました。専攻・学年・国籍を超えた一体感を味わうことができ、初対面の人も積極的に話すことが出来る雰囲気であったという感想も多く頂きました。

私たち主催者側も、非常に楽しいひと時を過ごすことが出来ました。GSIDの明るく、親しみ溢れる雰囲気が好きだからこそ、新入生にもそれを知ってほしいという気持ちでいますが、今回、新入生たちのパーティーへの反応を見てみると、GSIDの良さを十分に伝えられたと思います。彼らのこれからの学生生活に対する期待を膨らませることが出来たのではないのでしょうか。

その後、院生会実行委員やGSID内のNPOである国際理解教育講座EIUPへの新入会生も大変多く集まり、また、5月9日に行われた掃除キャンペーンにも多くの人が積極的に和気藹々と参加してくれました。これからの院生生活が益々楽しみです。



新入生歓迎会プレゼンテーションの様子

出版物紹介

2006年度、当研究科は『国際開発研究フォーラム』32、33、34号を発行しました。同『フォーラム』35号は2007年8月発行、36号は2008年2月発行を予定しております。

『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記URLアドレスより全文閲覧できます(21号以降)。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>

お知らせ

オープンキャンパス 2007

皆様のご来場をお待ちしております。

- | | | | | | | | |
|--|---|--|--|----------------------------|--|--|----------------------------------|
| 日時 | 7月13日(金) 13:00~16:30 | | | | | | |
| 会場 | 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 [地下鉄名城線「名古屋大学」下車] | | | | | | |
| 内容 | <table border="0"> <tr> <td>(1)留学生相談、施設見学 13:00~14:00
見学できる施設:図書室、言語情報処理室
(コンピュータールーム)</td> <td>(4)専攻別説明会と個別相談 15:00~16:00
各専攻別説明会(教育プログラムを中心に)
個別相談 教員と院生が対応します。)</td> </tr> <tr> <td>(2)院生によるGSID紹介 13:15~13:50</td> <td>(5)展示 11:00~16:30
海外実地研修、国内実地研修について
研究科出版物</td> </tr> <tr> <td>(3)全体説明会 14:00~14:50
専攻及び教育プログラムの特徴
GSIDの入学生の構成、就職先
入学試験の説明
院生による特色ある社会貢献活動
GSIDでの学生生活(院生会)など</td> <td>(6)海外実地研修、国内実地研修画像放映 13:00~13:50</td> </tr> </table> | (1)留学生相談、施設見学 13:00~14:00
見学できる施設:図書室、言語情報処理室
(コンピュータールーム) | (4)専攻別説明会と個別相談 15:00~16:00
各専攻別説明会(教育プログラムを中心に)
個別相談 教員と院生が対応します。) | (2)院生によるGSID紹介 13:15~13:50 | (5)展示 11:00~16:30
海外実地研修、国内実地研修について
研究科出版物 | (3)全体説明会 14:00~14:50
専攻及び教育プログラムの特徴
GSIDの入学生の構成、就職先
入学試験の説明
院生による特色ある社会貢献活動
GSIDでの学生生活(院生会)など | (6)海外実地研修、国内実地研修画像放映 13:00~13:50 |
| (1)留学生相談、施設見学 13:00~14:00
見学できる施設:図書室、言語情報処理室
(コンピュータールーム) | (4)専攻別説明会と個別相談 15:00~16:00
各専攻別説明会(教育プログラムを中心に)
個別相談 教員と院生が対応します。) | | | | | | |
| (2)院生によるGSID紹介 13:15~13:50 | (5)展示 11:00~16:30
海外実地研修、国内実地研修について
研究科出版物 | | | | | | |
| (3)全体説明会 14:00~14:50
専攻及び教育プログラムの特徴
GSIDの入学生の構成、就職先
入学試験の説明
院生による特色ある社会貢献活動
GSIDでの学生生活(院生会)など | (6)海外実地研修、国内実地研修画像放映 13:00~13:50 | | | | | | |

お問い合わせ先 / opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp